特別
へ5
1803

1863

世まもてきて
祝詞なんとは
出のそこ乃あう
好えて書ひよう
色ある
歌とるつき神と
心乃ほさうつうも此
うの付合はうわむ
といへもむふもをい
文古石うの考へて
を形歌のこは号をわ

をまつ所にかなをかきあらはす
と面白き歌あるを人のつくる
歌に付るはいまゝ乃中
乃こゝろ一あるの縁枕
こゝろ中ゝ合ゝ合
枕ことわるゝふるゝすゝと
かゝる所の海もを
思ひあまりたゝいひ
ぶるゝ成こゝろ
ゝゝあまりたいなるすは
梅ゝ志ゝ雑部のも

とゝひなつゝ学よをしる合
志ゝ紅物枕ゝゝ家ゝ
なを屋ゝ屋つの
まこゝの去第成ゝ硯の
多枕部を一法のてよ
う枕ゝ見こゝまゝ加枕
と仰ゝ小ゝ歌物枕集ゝ云
ゝ付志ゝてゝめゝ年と
なゝ如縁ゝこゝ乃ふゝい
出ゝ云ゝ好ゝこゝて面ゝゝ枕
ゝふゝう歌ゝゝ志ゝゝ

女夫第同録

天象一　神祇二　敷嶋三
禁中四　官位五　勅教六
人倫七　名字八　文躰九
衣類十　飲食十一　冠物十二
器財十三　武具十四　工具十五
書類十六　盤上十七　音曲十八
敷物十九　名所二十　山類二十一

水邊 九 二
居所 九 三
農業 九 四
遊興 九 五
樹木 九 六
草類 九 七
鳥類 九 八
畜類 九 九
虫蟲類 三 十
嫌分 九 一
駒 九 二 馬具
駕 九 三
生類外 九 四
降物 九 五
從事物 九 六
夜分 九 七
戀 九 八
金銀 九 九
米穀 四 十
慶賀 四十 一

天象

月華　星月華　月星
三日月 西方名　碁盤星　星月計
星甲　秤乃星　的星
天竺軍人　天大豆　梵天瓜
天上まぎり 夜叉　稲妻小紋　刀の月の輪
源氏かつらの月　玄賢僧正　月の輪禅定
熊の月の輪 山城　月の輪里 俗ニ云ヒ伝ヘテ　的星祇
星合 遊会　星月夜　名月院　天竺山 山城
月寺 山城　月山 山城　月新山
月山 摂津　月山雲 山城　入月星 京北大動　月星 月の傳説西是也

可花未動
頭巾山　有明浦　信濃　天川　川門
イカツチ　伊勢　伊勢
雷山　大和　星川　星合渡
尾張　可花未動
星ヶ崎　星合山　月向山

寶殿三光月日星

右名所にて可

名月山　月の山　星の御殿を
万代
さゝせる布と星のるるか浦浦
近江なる名月星ハそふより
無さうなへきまりなへる　漢人名
月新山せるあしらるあと
境川
いるる神乃市あるゝ
ちくとくとくとくとる
月おれ浦乃あるれ　釣舟浦

時雨降る狩より毛枯色こきハ
うつれ入月れ星乃枝葉ハ　冬春
紅月新てる月れてる月そ
面りけれてんさいふ和と
夜漏さ雲れ松尾こて
稀代秋　月新濃　尾張
多る間て乃河原よ立芳ハ
可花　雲ゝそ乃宿る秋れ夕雲
大原之神丹ハ雲ゝれ
いうち山よ立ゝさいまに
かさりれ稿と行
たてる小ゝ星川れ　鴨長明
星崎れあるの乃れいさ夫の
駿河　かの毛ゝりハやゝよんと　仲実

伊勢の海やなみにかゝれて波枕　几門倉

うしやさらん星合のま
よしと経て歩行はかりか天の川
天の川とらん星合のやま

神祇　二

天神髭(ヒゲ)　恵比須紙(エビス)　えびすの膳
えびすの魚　えびすの鴨(シヽ)　夢想宮(ムサウ ドノ)
大黒柱　神子口(ミコ)　寄せ舟の為
毘沙門から天神(ジン)の為　機具(ハタグノ)の為
かゝら寺の為　蛙の熊野参り
神鳴　神子淵(が)　神子の淀
神楽堂　神楽(コシ)　法楽見越(ノタケ)

起請坂(キシヤウ)　神の宮居　神垣山　大和
行列入江　清幣鴨(テクラ)　木綿山
木綿滝(ユフ)

神鳴の波乃声よ沖のはまくも　大納言資実
かしこき御代のためしとそ見る

誰しらぬ雲のうへに春の
ゆふ山いつる月を見るかな　[illegible]

ありそうなしと思ふ[illegible]
神垣の松乃もとしの声　能光

神なきの浦くもれにさゝなく
なけてそ行る木綿滝の雲

鎧金やみかしの嶽より清て
いかの渓川よ水ま[illegible]て　[illegible]仲

いなの神の御子名あつあへ
る事 秋の月あつあへせよ
の業也 京の小姓の法師
彰文 をしむ心ハ
ふ事振神うさ山の名ハ
兵八 河面よりあをくうりへ
苦をうく沙風さしかさのさの
万代 八ようつよあらむ
隆家ちくふりえにつりあく
白妙ありやうそくこそ沼 源家

安治 三

歌濱名 横ヶ河 輝の宮
うすり宮 舟宮 ゐる土宮

まるつき宮
留れ河口 恢ヶ 秋治 冊仮 秋接村
うこれ治のさの下西ハ
毎月のりれ書そ中山 後妙
うこなそれ村よ猿人参ひて
治れる代乃ちくを中ろる 近房

標中 四

天狗川裏 宮西猿 宗教家 海階山
玉雲山 黒ヶ淵 黒ヶ猿
海ちくよれこもりうれのとれ内猿
ます 猿ヶ書の書れ猿ーさ 代実
汝るとを枝をも法ーを井ハ 狩
海ちくれ山ちうこれを

あらしの中を門をかたんとすれの
山れ隠れる月れ出りハ 和泉式部
きりぎりすと書かてハつるんん
良忠
月ハ月れ秋の夜れ月
誰そこの寝覚えてこけハあさ山つの
くろ雲れ横ぎりてこそ
官位 五

大納言小豆 小納言小豆 五位鷺
アツキ
松ヒ左丈 亭主関白 竈将軍
テイシュ
中将姫 花れ王 太子桃
花陣
位山 絶会 匂当
コウトウ
うゝの山ゆとゝろてのれ
新古今八
ゝと見ふ石ゝよ行ましひめ

南無阿弥陀佛ノ絶 河ぐ芝
山
河原陀羅 茶師茶 佛れ定
仏市茶 同ノ佛 親言茶
相馬アンカフ
小仏越 勝れ分腰 如来ゝ
フケサウ
普賢象 地蔵良 佛法僧
ヒシリ
聖宮 極行柳 波羅樹
メルヒ
達ノ茶 達ノ正宗 雷達ノ
刀鍛法
教迦汁 宮布袋 布袋鞍
ホテイ
ブ
俗勢 仏胴具足 蜻ノ道
タヒ
後美坊 行者山 除数
奥
猿菌寺
カブラ

殊数珠　殊数熱悩　禪ノ法
殊数つゞ　おさゝ　ゝ　不動坂
庭禪苔　蓋掘樹　だんとせんま
親鸞　振法師　経房子　ゝ　法華経
文書　奥羽振法師文殊　法華経　奥羽
地獄尊　地獄　嵐　田　看経
須巾榜　法華味噌　心経甲
庭禪松　六道　蓮華野
傷　餓鬼　漢
釈迦堂　二王　十王頭
十王　泳勤　西方ノ名

今よりハあとゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

人倫　七

五行文母　木火土金水　花文母
大名行　大名星　大名月
五行榜　宝蔵菖　熊谷榜
榜　熊榜　児熊
児文殊　文母桃　姫桃
姫玄　姉川　姫荒
姫糊　暁池　姫百合
姫坂　庭双線　庭双名

[illegible]
才子 [illegible] 釈子菓 [illegible]
[illegible] かぶら菓 義菓 [illegible]
才菓 [illegible] 焼荒 焼竹
男菓 焼橘 男山
男へ 清盛 尼ヶ崎 焼柳
焼口菓 男清び 女むすび
女竹 吉野 焼ヶ懐 焼鴨
[illegible] 年寄茄子 雷女
[illegible] 孫ヶ山 孫ヶ朝
孫庶 唱食夏 唱食灯心 拘牝
義者菓 [illegible] 女菓 焼ヶ萩

木樵虫 稲ノ屋 二子の雨
捨子 [illegible] 小町踊 [illegible]
熊坂谷 温人行 温人犬
漬子温人 [illegible] 二子山 [illegible]
[illegible] 嬰児山 [illegible]
姫鶴 紀伊 姫峯
[illegible] 姫ヶ浦 [illegible]
[illegible] 三川 [illegible]
[illegible] 清盛 [illegible]
[illegible] 三川 [illegible]

思ハ又近江の奥津淵しいかにも
奥津浦ある難く見えけり
今乃浦とよめるは遠の名にや
添見んてある

流れせし二子の山の桜かな　後拾
よにふるみちも清かべきかな

六帖
こゆるぎ山若木の花よはなくて　同
あくれ菜くむ花を袖にいれ

まつとはやうの孫ハきくと郭公
みよりも子山の井の水きけ

うつそみの思ひ子の山見るハ
懐中
見るハうつしかりぬへきかな

旅鳥や小松かもとの田鶴ハ　讃岐入道右大臣
干とせを千ともかぎるらむ

男山おひたる松よ末ささる　
千丈町中
かさならむ末ぬ君か千世ハ　西光
たぐへてハ信濃なる田とちかる　
月とむかう名の外にありけれ　西行
春大寮あやしき寮よく京をそ

名家八

景政	友長	言定（サダ）
保昌	貞光（サダミツ）	頼正
重平	重守	守久
助常（ツネ）	吉猶	友盛（モリ）
兼平	正清	安頼（ヨリ）
助如	友如（トモ）	真守（サネモリ）

行平　則祐　宗貞
定家　友則　包守
義光　助近　助延
吉家　吉平　吉友
吉守　玄平　光守
是言　有光　則清
為義　為助　荊田丸

右ハ諸々古さ　振治れ名
あり初ハれ　詠消ゑ青れ
さゝひゝゝ　さゝ人の名ゆく
幼る幸ゑ　ゑ和ゑれとうれ
付合ゑ　ゑ

春

ゑや　ゑ代を城下れ
掃れ名の日ゆ　治りく　新報
ゆ度ゑ　ゑ同　高地
さゝ姫ゑ乃衣　ゑれ　玄れ
ひきゝれく行ゑ　仕坊
枝木れ　ゑれ牛乃声　未得
具是　ゑ治ゑ　ゑれ附
れゝく　ゑやゑ　ゑ
ゑゝゑ　ゑ乃ゑ
ゑれ　ゑれ　ゑれ

砂の中に松風を家くれる芦
の花ずゝくれ侍るく調和
かぐや洞乃雪ふれあぐひ
咲あまれ花ゆるあぐひ吟松
屋根風をゆるやうかをれ
匂ふ梅ふ清水詩あて季吟
二月ふ正月てとるをとふ乃芦
かくれ乃和ひとふ水梅盛
山里のこゝろふ月てあるはひ
花の法宣とりさすが出ていあり一函
見ふ人めを夫物を花乃タ乃雲
ちるり夫のひを雲よ入る孔也

伊勢物語ふ寛ふ江戸梅花
行乃船しります柳 糸かな
あゝて行ゝく面白ふ芦
ふ食のつかみし寛ふ梅咲て敬
数入公令下や たり花乃芦
餅とちこひまるうひを鶴の正勝
雪よたゝよく寛ひあまま紫
鶴寛ふ名ゝて面白ふひ踊ふ
千金と祝うゆゝへの花乃時
一宮よ一羽帰ふ長屋ひ業芦
世ゝく ふ多ふ物語ふ集のに
梅ふ分ゝく行てあそ也一歩

んとく之方は鶴よりおひしひ　赤塚
そちの美人初こちの賞そ面姿仲
こゝ海の苔に交りる神原　岩持
其の巣似る雲鳴風雲不下
神代乃もよひ可れ老　中村
大原やそわ人人勢へ一回
あくておさしるい遠く　山口
こゝろきれいそ花峰仮信章
も一月泊ゝ花ゝさうふれ　神津
たうに立茶とつて嬉さ忠知
あく遠のめれ酒を何ゝ　堀田
見ゝるやゝ茶めてる山桜西陣

焼のゝる山れ本立ふいゝ花つさ　竹尾
まを遠ゝちゝ蝉れめゝゝ信建
風ゝめ蕨ゝ山れ形　大谷
澄れゝれゝれゝ糸柳利里
為まるゝれ雲よ堀ゝれく
ゝ賀れ道ゝ花ゝ作者ゝ糸
白雲ゝたまく似る花蜜
ゝ打ゝゝ光ゝ蝶ゝ　中村貞政
降ゝんと思へて茶と前さて　大信
野ゝ刀ゝつ面ひゝれ玉子忘据
えゝ矢ゝと敬ゝ神社ゝ　妹尾
植ゝる花乃本花ゝひゝて　妹尾彩松

正月立春の日

雪の内に花の咲けるを見て

春ちかみ花の面影やあらん心変

はつるを惜さりてをひより

いつとなく流れてぞのこる是心 和賀

何年を経てくんん雲の花

実と結て潮くさ苔むすつる 海保 岩西定

石垣の白きを見れば波越く

物下れ学しとやなる〳〵世く忠知

変く返て小田れ泥ゑ

いつもくそれをそれを称せをつゝ調和

あもあ〳〵ん〳〵きれ山

あれ花の雲ふ嵐れ声也 資仲

乃て白き柳や実も訪世者

花ゆく知る空ふ〳〵さう 西猪

りゆれ紙ふ雪又ふ入く

年ふ山ふ学乃一えぐ雲れ

花よあ〳〵そふ也と梅の色

山ぐ也ぐ伊ぐ〳〵ふ桜朝 同

梅れ真ふ雪ふ也れ

天も花ふ酔れ紅色れ 同

家くふ柳桜を梅ませて

都れ雲れ錦乃山 同

奏庭て学れ紅よもゝあ

学者学ふ花も井翰 同

うゑし梅の花はいまだ蕾なれども
雪ふりおくるこゝろのいとゆゑ言ふ
月は新たに春くるきらしの髮
山の端はまだ乃きてれ小柳　同
霞やく煙よりきたるこのゆ
風とゝいてこゝ雪あるを見て吟松
雅藤の松風うるはしかれあるさ乃要
如意の松風うるはしかれあるさん　同
山も東雲西雲れ　張
同じゆうか柳い柳花雪鶯
雪ふるこゝやうふるこゝやうふるこゝ
春うるはいまだ梅の花　二月　立志

大年幾くゝ鶯くゝ鶯ハ春めく
松ゝりあのはこゝ門を松餅　同
古くゝ乃民新年乃西古乃物
山切りぶよゝあるゝ　同
あくゝ空しるまハ家まあや
いづまおくゝあるゝ　同
きて民はれ出りをせ次
家もあれ家ふるゝ一寄
祝ゝりはるゝ元年ゝ
みゝり立張の松やかあるゝ　二月　立張
門うゝるせ祝ひ下ゝ　文景彩
やゝりゝ我ゝ宮ふ年男　立張

立春の日のあを柳あさ緑色
はるかなる遠山はくっきり立春
二月の末の雪とめつる柳
こぼれ花ゆきよりおそく咲らん　同
まりの如くうりゆうの山道
たべ酔て音絶て極楽の狐　同
あるごとくなる牡丹はいとれを名所
はれて名所つるの巣　同
雪ふるあるは鳥の死ぬ物ならん
よくも隠され完を春の日　同

蛍

立花の分一乃名所
宝家うつれ義とあり遠玉乳
祝ひ粽ちんこ物とおなじ所
ちれちるれ恋する男の根
勢んて心一川の川狩よ一国
なるるやせ男を持仏堂
蛍心法りの時れうん　京後
ここさうの湯れ山郷
ひれ私面に浮くまでも　木下
彩色ちれもあやめく
布とれ　政幸

月ごとに花鳥よ化粧をなく詠
ぐ白雲と雲とかくれる遠山 正勝
八月毎に十番までの名所合
ものとさきにのこりをすれ 中田 芳
思ひとまどれまりいつまで 心友
ひたすらなみひとれ山郭公て敬
菖蒲 海こりや色も人の名
昔八月乃紅葉紫粉さてめ 角田 宗忠
乃手くくり四ゆれ池乃
ちらす紅葉ぞ 松田 宗入
紅りちひ乃ふ何やうやれ木
乃色紅葉と敷とびて 調和

雲とれやうれ月こ乃色やま
宮とある乃めぐ下秋涼くれ 翠工
出ぬ乃の数多ものし 山甲 乃秋
蓼乃りもかさ持さ乃京 宗入
乃入とこて流乃水おれ
川波りもの粉つの時
光て出れ交れ花さ山 中村
名乃あ新樹ところも月乃素朴
生池よ子あまり夕涼
蔵乃本法や月乃雲 素朴
もの牛房れとつと神よ入
ちるとやいやれ雲資仰

郭公奈一声、をきたるやれ
卯月ぞ忘られぬ　同
宇治かへ入へ〳〵に敷れ河せん彩
立れ敷へ中を面を方て名月山調和
難波江を引や寒病つ〳〵て
ぱ(たと)来(そ)藤れ旬八とくい世臭一回
見りてそたたくう山れ秋乃来
伽藍乃れ立ひ〳〵て郭公　同
立月周て〳〵さて〳〵寒れ
庶れ子の昼立を光りと(ら)正勝
落くしの〳〵き川橋れ下
みれら菖蒲れ家の水れあい　同

みどりれ多と海とこけ〳〵ぶれ
京まをてあやめを口あ花菖蒲　同
月さ入郭公は和そうの〳〵さ
乃重ら高山樹れ〳〵き垂よ玄孔
法光れて肌をそぬけ
暑ス見と長屋れ乃て〳〵を　同
垂れ井れ〳〵和ときやあり〳〵ん
蓼て〳〵出乃世を行〳〵さ　同
さつりとち〳〵る高れ家屋
と〳〵て〳〵て〳〵てゐし世ゆ　立
人間を水や南に方垂汗
昼ハ長て〳〵郭公び〳〵さ〳〵　同

[illegible]

[illegible]

秋こんるとかゝくあんとの

[illegible]のもんゝ楓 素外

宝文十三年九月廿九日 [illegible]

[illegible]の男御

水乃みなもゆかんとせし 同

紙燭[illegible]ておらうゝせれ

いとゝもゝ入てうゝ[illegible]敷[illegible]内 素儀

[illegible]

[illegible]

秋

[illegible]

[illegible]大名[illegible]宿

いか[illegible]あ[illegible]入よ 調和

[illegible]ゝ[illegible]姉やいりうと

[illegible]月を[illegible]ゝ 正隆

[illegible]月[illegible]ゝて

[illegible]一禹

[illegible]二子山

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひさかたのくもゐのうへの月の秋
おもふこころ孫牛
たかめの宮こ紅葉
月新をうつる水行く秋 竹水
見りくめるこ戎義野の菊
秋ちぎれの紅葉り衣類とあく 吟市
うゝ拾ひ玉ゝ玉ゝ苔
水不香鏡の宮月さて正勝
よろこんやゝゝきて秋一せ
紅葉や玉ゝ又秋乃菊 斤山 漢竜
と鶴乳とれて風そうあく
秋さねと初て鶴入て敬

交賢れたゝ月の秋
前ゝ田の稲つゝ山ちん一風
仇秋れ山田ちゝ山ちん
玉玉をゝ吟松
紅葉ゝ嵯峨の人
ちゝゝ月の新法師 斤山 後徒
かゝるちゝ酒の牧場 山田 春重
稲ゝ墓ゝ松ん法
菊ゝ月ゝ菊ゝ墓
月ゝ山ゝ
孫ゝ出ゝ声ゝ入 神戸
ゝ月ゝ稲ゝ

天の原すゝのさえ月を恋　冬包
夕暮に見る影山のあかりく
ほまるゝお南の月を見のますい　こゝろ　扇弁
口によせて往来や月を錢りいに
餅ともむ唇の音て夕暮　西まくへ　昌之
都やめ花のうてはとて川かれ
くろくれはあふ姿を見せて　鶉　良政
よるのねとてきちり縄のれりの
月の笑ひいり稲画にゆめらん　心友
白青の月を氷のよし
冬夏のさやとまうは細かて　不卜
あたれり腕をもえくしぬ字

まろく思ふ平西宮を猪とおなな　包
色や青くあかりし来れの紅葉に
あらためて砂衣をぬる上戸　正捨
一ちいよきう絶のうる川乃中
色うちらくもさひの柾の川　同
清水さうりちりくきを逢坂
白き月の影を重ぬる馬とめ　未鶴
太鼓方から山留士の濃る尓
所の朱ハうれ物くさら体飛踊　吃帝
庭衣とおくかりえんかうらめ
白宵道を出合界と星待　不卜
あさやか談ゑそ刀ゆれの思乃文

みちのくにの十六夜の月　信建
又常陸にそなむ丹波の国の者
てゝ行事や不孝のうゝん　素礼
然れども不孝のうゝん　同
三月の月は出ぬ　同
あゝ面白き事ふかのちの
松よりかゝるまれなる　同
行りの月のそやゝ
面影と独の後いとやうなる　信建
月をさいあすくいとゝ
夏夜を笑る月のゆゝ　素
白雲はたゝゝひかれ年ぬと

世子あゝゝんゝゝ　同
ふさりひ涼乳とて何ぞう
月へさ乳の乳のつき　同
たゝゝとゝ乳家数そふ結のと
赤ゝゝ摘れゝそ萩れ家　同
たゝ捨る蓮ゝ人吉のり
蓮をまぐ記あゝ紀紀食付　同
りはそや作ぬとりいとりへ山
乳芋れ家や赤けそめるん　同
是を色めゝ出家芋に
三月れかぐぐ乳海を仏供て　素志
あゝゝ花いりゝ月作ゝ　同

一度さりくしく事ハ秋ハ月ハ高き
こゝ嬉しやかめくりあゝ時
りみりする秋の夜を一対毎 同
さりもしくもとゝ狂歌もとゝ虫
雲隠れ出いく風ハ秋をひえて 同
下もうさやさやさや落さハ
のゝくかうさ雲ハ秋ハ月 同
立もちやさ十三月ハ秋ハ風
月も進くと位ハ月市に春
さりてもさハ秋ハ月ハ
枝ハ秋ハ柚味噌あそすり 立儀
花のゝ茶ハ月ハ月ハ秋ハ

中に秋ハ月ハ
堀ハ元ハ月ハ金ハ
位ハ月ハ月ハ
秋ハ月ハ秋ハ 同
知ハ月ハ鉄ハ秋ハ 同
浦ハ月ハ月ハ市ハ場
月ハ月ハ煙ハ酒ハ 同
秋ハ月ハ中ハ
綿ハ秋ハ月ハ 同
切ハ月ハ秋ハ 同
秋ハ月ハ秋ハ月ハ 同
みハ月ハ

ゆあらしく菊の葉ちる花て立後
一葉ちくちれ後ちりの村
朔日も世月祝つる菊会　同
月花と鼻にうくとおもひ
たゞふたゞこと酒のすき覚　同

冬く

あれら菊れくく新蕎麦
ちくちん幸とゝ紙子　敬
冬ゝ菊や落ちゝかれの年
傷ちくいそる玉咲ん梅　隠章
又一貫八十銭ん神ゝとくく
ちくみや残ゝ仮耕　素朴

川乃ゆらりに生つゝ
あるやゝ寒ちくの孔つくろひ　調和
ちちち玉池ふかくく深ちり
子鮒の孔ひれよりき水鳥　左色
たとれふそかいちりかいち貴ひ
ゆまつき見とを寒無越ち　雅
ごうちちとゝ安ちりるあ面つき
木葉ちりれくちたゝげ山　政幸
面ちたくきて雨れる庭
鼠ちの河ゝ氷鈍　謀心
蕎麦ふ財を雪ちこうく山
馬ふれくちちと花のつれ花雪ちこ　不学

衣とも数をつらねおきて
古をしたしく狸あり川まで 春
衣いろくるる時毎をめでる
俳諧世話ふる世をたのみ神宮月 玄札
詞をうり作く一体をとる
大君の神おもちゐ陰のうて 足利住 立波
あれ山人道の雑炭を老れ坂
丹波の小雪や大雪くの冬て入 なる夏
今夜冨士はる夫れ雪雪
京滑と三保はさあ波風 赤豚
菜ふるすや寺れもつん
契者行ふ名ぬさ〜君の中 竹水

作ん仏切ものひろ〜大田ひろ 竹尾 信建
雲よりもぬさを集よ敷く
ぬま遊鷺八重あや〜ありけり
叩笠と夜方ゆ〜時毎 正勝
よせ海る波よ朝ひろ〜く
鷺ふれ羽風を作る紙ろ 玄札
八十八ひり年代ひろ〜きさ
ふる風雪ふ〜ふ〜ふれ分ふ老 調和
ちひとあ〜ん枝とあ〜ん
世話ん〜雪世ふ〜ふ〜ふ 玄志
時毎ひろ〜く強て雪ひろ
冬宿風の〜神の神 立月 同

打込板をみだりくぐるの
綱代を毛無川波越く　月志
佛と成ぬらわりもさわり
書しるかあり水書のり　同
かりてたびやり忍めくれの袖
寒不死ちる雪れるく　同
北片くに風吹くさむ雲
書出の雲のぞるや中時　竹水
附毎り氏却や蛙乃ぞれ水
蛭ふ地りも書より遠年立後
いけるを敷川うれ意悪ぬろ
書家を遊書めくあるる　同

服ふてうたれ
うりて鳥ふ
ふ鳥あれ　同

神祇

月記くく雨降乃臣小臣
和光の氏まわ内かかる文　武田五信
市場入てやのあ祇と神
義と加義又下加義　宗
作て　鏡い肩と
おいて祇樂の詠や物しん　将湖春
詠遊祇れ社とくくく
と和尾と言本綿ふれ鳥　正勝

和歌浦の神つれさり引ばつて
流生とめくむ神はなしろ 後鏡
引はあまつれ神はなし神主ん感応
大神宮はこれ三ヶ所ばく 調和
神は業の業はしたまし海ばく
大日は業はしたまし海ばく
大日は業は像よおのりて 玄礼
多つはこり毋は湯ゆてくあばく
神子はおりて小まるは神 他 敬
はとて詩ばるは出はあいまり
山王は猿小は猴あいまり 猴 玄玄
多つてはるる玄の多はて神
神は象小るるて小蛾とて 安井 昌

佛は事やいむ法ひ事
玄玄はいつまれてん 浮仲
うるうて教えやあるは猴乃
ゆうて教えやあるは猴乃
一里は猴るゆへりゆへ
民神まつるは湯玄海 大井 惠周
ゆうてくやあるは神まつり
打海るは法は橋雄つ物ゆ 勝
ひくくりつて文ひ連つて
法都とさけ神彩るゆ 同
かくはそれと物む大佛
月海はるゆ乃餅ゆまん丸ゆ 浮仲

家は藤ゑからうとやいはむ光りくん
来りの紋文乃女銭　素丸
一文の銭を惜り付めとし
さゞれんをも月の代まち　同
いくりともなく奠を釣針
白髪ハ絲の花ちる身の祖　臺
春の京好こがや春の方
流行木まで花さくや雛　正勝
祖母さり来て手に結せよ
業内これも施粥の支丑　立儀
夜もたてを宮神まいり
りくつかる氏へとまき二人相　同

釈教

今の夜化乃去縁りとあり
為偏ハ釈迦のとくれ出る乃老く　正勝
をろく海苔多武の峯こ入
為りとハいよふ聖の菜外よ　松江 維舟
うきぬ帳の内乃居するき
早傍くやすより精進難や　一園
柴ゐも不動の戸張の丸あて
蓋の行衆も志る私行人　誄ん
芳渡も其の智乃寄貴八川
住の主にまけ母の方便　忠昆 寄宗

志ぬを吊ふ殿色の夕露　喜貞
鳴虫を雲に湿して六道にさ
花を濡すわらふ思ひふしも　一宮
如月七日を以て詣つものを合
備もりて神に酒まゐる　次
まつ雛や大慈大悲の観世より　重礼
やむく生れ人の娘しやか
仏乃まへに致ふ　梅水　花学
身を鉢き見をもみて見る也
あさむ乃一字を結ぶ二王門　心友
賓をさす金亞の偈の縁の誓
現世の果のあつ梅ちる寺　大坂 近之

志るよしもその一念乃宗さ　水下
先達の一門の秋も露智小
参詣の此ん乃中はのとやうよ　陽臺
一枝の花も口ずさむつ也
みよし野道して嫁のむ方位
人気ある北山を行人のいさみて　一叙
うづめすこれへつまして門に
吊へる寺の寂しの夜こそ今宵　利里
鳴出る鳥の深み所あるむ
三尊の仏乃教へよく知りて　正重
出ての和のひくに来まで
我宿の梅乃去年や法然堂　素朴

おもふとも水もうやうの玉みに
雲はひとつふうし出る月　(三河)童次
出残をも口すゝ秋はなの宮の
来るそこまでか浪花の舟　業粮
三絃も夜の宵やまひせり
かんさんハ其ころからかへ逢よ　(京小山)童尚
ゆるやり日由を仙女も斗ん八
旅は海の先生ての歓世音　友可
おく事ハ青きくねきうから
ふめ将橋にきて女郎花　お色
そのつる般若ハ道にしまふ也
定灯てらく寺の門前　折松

法説はきゝ身をさらしをり
やせたる人も僧の身　正勝
衣箔におしげの誦にもよりて
結ぶちかひの夢の行人　同
秋もしかとてやかの二道
うきや吉野の奥の寝覚せよ　同
奥より出て肉食をそ詣
寺物の祖ハ山に住なれて　同
壱府いまだ来さる庵前
まえ文世界に出る佛にて　同
車にひかせしより三熊野
あるもの地獄の絵を衣なれ　了致

お方は年寄りまさらう顔はみな字
御拵えの法を知る袖 一枚
現世はこなたの世をあいかふ
神をあがるも大月は国 不下
為力やとをさんとのこゝろ
らりてむりふ三十三間 元
後りをの後りをの世 同
祇園七五三とゆ世 同
ゆみ夜さてをんやとこれ
ぬり道てい法ころ坊 同
あやう老とのぐさあさ
海さまりひは海世のびさ 童

そこくかわらるなとこと
まざいてあや我の法同 立志
風かまりせて永代世へ
こをらるお稲いつ藤は 同
紙子一ぐん長つ道ん
ぬりまり清水は認言 同
こゝびとおりい梅は枝く
来世は躾教をさて世は 同
をかまて法とよむ
水は天とをさと吊し 同
いよいはれは力かり
夜禅する歌おり 大乗経 同

二度三度高野あるいんりう
校とさりつかり経坊立去
蝋燭はやくげりやく身うち
あゝ対揚やや物心佛あり不学
きうゝひてくりうまされやや
うぶ湯ひく苦と学ぶ仏生会 立儀

恋

山高はもの木きき恋病
乳ろう乳ぶさりをみたく赤ん
ゝるゝ乳と恋に恋命なよ
三千宗やまり育れぐ後徒

一寸さ記を名をたゝて
涙ゝあゝ結はあり法切一恋
立ゝ院ゆいはれるゝ乳
ひゝんなあぶ苦や法傷ぶやわ 素
衣は月かすとけゝ乳をゝり
文の髪をしゝぶ白雪 維舟
大ともとてもさあ宗法はは恋
かのふゝ世教とて恋人素法光
あゝ波のゝゝあ中とり切て
けゝぶや袖かまれあけ一瞬
答はかの下記かゝを恋ん
乃ゝあゝ組を血藤の姫うり 愛 破扇

男なれ初てくりよくらう
ふびんとして出家にすゝめ心安
力なるものもくれ人出ふれ〳〵先
妻はさすがに別れあくまで一固
ふれたもとりしかり酒呑系
縁組の心ざしつを定りて一段
めとり妻て男に敵と討かぶし 中川
こうやそれもいつわま男 女光
伊達からりとて人なとゞめて
きくとれの侍家にもとゝ 重
らもいつくへ行法陽れ豚
ちゝ為の男ゝ女やゝ 青信

形迹はいつくとそ
和の化に後て次〳〵陸奥 粗工
出合る中にさのこに前世あり
さうちゞるもそれ義づく 信天 光治
鼻れりけしをくがたくよ
涙ぐに宮為疫げもそのあ人 味心
若り為くゞ方をあきある
鼻けと安なさる和員あ此松
義をえたちまれ老かりより
乃ものく思ふくやゞかりよ 調和
やふぶたちるも墓れ和後
女はあるわこる野系後 業義

姫まで笑ふ度毎をかしきほど
油となりて左肩にかけ髪首も
何ぞれもちぐれての袂かけさ 西岳 泰徳
名ニて我身一州のくらやまそ
鳥の羽音とやそびつくもし
流行の芸は紫の門に相ハ定て 信連
名の女ふ字めやうみそうせんくり
付さしの酒碇めるや蔦 正勝
つる山林のかゝらぬ中
でらくれそろくに通ひあれ 浮仲
中ふ詠り おるさり紙
別達理の心とみゆるかれく 忠和

月に見るさめの平ら虫の書
長き秋の夜行に化粧する 一雪
里の夕しては三のふけ
外あれ中春のふりや 發貫
くさ〃さかる屏風そゝく
さられて案ま抱もよう一云
あるこ香りとゆひおせり
あの御達ぐをむ水祝 昌之
うみめさいのまん丸ぬ抱かれや
夢ごけかゑて江女房 貞良
他所の煙り江月もこれやり
こ辰つを待折婦に洗ひ髪 中村正信

引ある妻にんや海のうへ
いまはあやめくらむ五月の空時雨
我かりて又をのしと見人
下紐とくるかりすすく 一歌
うつまばくりかりよ高ふるく
遅咲とこれも見れし十寸後 一図
深下草もある坂ちゐ者
水鶏あり乃代びて 調和
生れ付みあや泉新れすかん
傾城よりて冷松
初ひること見ると合れ中
いとゆかれをみて蛟ちりや一園

こあれ
かるきれ
清水
丈れ
我せ
つ
ゐ
う起
ゐ
あ
いせ
えび

ちきとちふ傾城
弟子 参者中後て 来酒
三年う内八月云
笛とあるを人 正勝
このそく強れ
隣あり紀乳巣て 同
人かりてやのちん
ちたちはあれ 同
ちとれ乃家れ
あてこれ月半 素
ゐにあ縁やつさぬん
を殺八皇そけ 意

逢ハ和つく上氣をなおり
ちからをつけ氣を出し
みめをそこなうて庶そひ〳〵
あつき湯に浸て庶さこぶし 同
堅りつゝ玄をもみほぐすと見ハ出
いざうに若よ水をあびせん 同
そこを記ゆ〳〵く病いりせん
さう物ゆに物思ふ恋 同
若ゆくて治療〳〵や無常
起別逢ゆ〳〵ゆ内乃滝後
ゆくさをる松に寄る岩
別逢ゆ義とゆ〳〵嵐山 立儀

うつきに堅りいなるに
面て内〳〵我妻猫妻 同
恋と恨こけ
猫背に文り語ゆ
かりあは思ひそ
ちぶくとゆる 同